

白秋アートギャラリー (5)

言葉は跳ねる

椎名 恵理

独立行政法人国際交流基金が行っている日本語教育事業は幅広く、私も日本語教育に関連する新しい情報を求めて、しばしば公式サイトを訪れている。そのサイトには「日本語教育通信 日本語からことを考えよう」というコラムがあって、日本語の特徴的な要素を取り上げ、考え直す視点を提供している。そのコラムの第二回に北原白秋の童謡「言葉」が紹介されている。

言葉ことばはかはい、／ 綺麗きれいな魔物まもの、
小さな魔物ちひさなまもの、／ 生きてる魔物まもの、
ひいとつひいとつかはい。

言葉ことばは跳ねる、／ つまめば逃げるに、
てんと蟲むしのやうに。／ 水馬あめうまのやうに、
ひいとつひいとつ跳ねるは。

(以下略)

そのコラムは「かわいい」という言葉の意味拡張にスポットを当てたものだ。その時、ちょうど学生時代の友人（中国人留学生）が、そのテーマについて研究をしていたことを思い出した。

その友人の話では、恰幅の良いおじさんが、周囲を気にしながら頭頂部の汗を拭いている姿を見て、日本人の友人が「あのおじさん、ちよつとかわいい」と言ったことに衝撃を受け、研究テーマを決定したそうだ。辞書や参考書には、主に基準となる文脈や場面での使用例が収録される。「かわいい」について、小さくて愛らしい、といった意味は理解しやすい。

しかし、確実に小さくはなく、そしておそらく愛らしくもないおじさんに対しての「ちよつとかわいい」に違和感を持つことは、言われてみると理解ができる。しかし「かわいい」の幅広い使用に慣れ過ぎた日本人の私にとっては、そこで立ち止まるほどの衝撃はなかった。二〇二四年現在「かわいい」は、元々あった「かわいい」のその周辺にある意味を少しづつ巻き込み、新たな意味を得ながら、領地を拡大していつている最中なのだろう。

白秋の作品に戻ってみる。確かに言葉とは、動きまわる生きた魔物だろう。日々姿を変えるものに、時に手を焼きながらも、向き合う楽しさと奥深さを、白秋の「言葉」を通じて改めて感じる事ができた気がする。